

センター月だより

〒 507 0034 多治見市豊岡町 55 まなびパークたじみ 4F TEL 0572-23-3455 FAX 0572-26-8813

指導日誌より

= 瑞浪地区 =

生徒会の「あいさつ運動」と一緒に登校してくる生徒に声かけ。先生たちも出て来て、校門には活気がありました。(12/3 陶 E)

バロー裏 19号地下通路はとても明るく、いつもよりゴミも少なかった。寒かったが野ウサギに遭遇し、とても温かい気持ちになりました。(12/5 土岐 D)

小学校、中学校の校門で声かけした。生徒たちの元気な顔で、こちらが元気になった。(12/8 釜戸 G)

日吉中学校の生徒が育てたパンジーのプランターが、町内の各施設や歩道にそなえられた。生徒たちの明るくきれいな町づくり活動が、町民の笑顔につながっているのは大変素晴らしいです。(12/9 日吉)

稲津小へ向かう中学生に出会った。バスケの練習に行くとのこと。自宅が近いが、気を付けて行くように声をかけた。(12/11 稲津 F)

土曜日のためか高校生等の学生の姿は見なかった。駅前のバサラカーニバルに参加の学生はいたかも知れない。(12/13 土岐 C)

雪のため、さすがに寒く、出会った子ども若者は中京学院の学生数人、中京高生 3人、塾帰りの小学生 人のみであった。(12/18 瑞浪 E)

= 土岐地区 =

三起屋バローのゲームコーナーは 12/20に、リニューアルして再開するとのことでした。(12/2土岐津)

お薬師の祭り会場を巡回した。中学生や小学生のグループに気を付けて帰るように声をかけた。消防団の方と意見交換できた。(12/2 駄知 E)

中学では尖っていた子が頑張って高校へ通っている...という子に前回と続けて出会い、今回は「こんばんは」と頭を下げてあいさつをしてくれました。「頑張れよ」って声をかけました。なんだかとても嬉しくなりました。(12/3 泉 G)

これまでにない寒さで風も強く、歩く子どもたちもいなかったが、時間を 16時 30分と 30分早くして、中学生に多く声をかけることが出来た。ウェルフェアでは、ゲームをしている子どもたちに声をかけ、職員の方と交流もできた。(12/17 下石 B)

とても寒い日で、車で迎えに来てもらっている生徒が多くいた。徒歩や自転車の子は元気よくあいさつしてくれた。ネックウォーマーで顔が見え

12月 声かけ活動の結果

	多治見地区	瑞浪地区	土岐地区	合計
指導人数	3	0	0	3
声かけ人数	517	110	200	827
指導員参加者	66	30	40	136

ない子が少し気になった。(12/17 鶴里 4)

小学校の下校時にあいさつ、声かけしながら、下校に同行。昨日情報があつた不審者への対応について話をする。(12/17 曾木 5)

寒い日でした。児童センターで情報交換。小中生のマナーは良いとのことでした。(12/18 肥田 7)

= 多治見地区 =

寒いためなかなか人に会うことが少なかった。小泉公園に放置自転車があつた。後で警察へ連絡する。(12/9 小泉 5)

まなびパークで自習している高校生や、多治見駅で下校中の生徒や勤め帰りの人々と、あいさつや声かけができてホッとしました。駅前交番に立ち寄り最近の状況もお聞きできた。(12/9 南姫 9)

小学校は早帰り、高校は相談期間中であり、多治見中学校の正門と東門に分かれ声かけした。さわやかなあいさつが返ってきた。前日からの降雪で寒い日であつたが、子どもたちの元気な姿にあつたかさを感じた。(12/18 養正 1)

交流センターに、新体操や空手の練習に来ていた児童が30名近くいた。遊んでいた児童に声かけし帰宅を見届けた。交流センターの情報から、ライターでの火遊び、雪玉投げでパネル破損等の話を聞く。この時期火遊びに注意していきたい。(12/18 根本 10)

校門にて下校時の声かけ。雪の寒い中、子どもたちは元気にあいさつをしてくれる。大変心があつたまる。(12/18 脇之島 12)

残雪があり、下校時の小学生が雪の投げ合いで車道に出て危ないため、注意した。(12/19 滝呂 8)

福祉センター太平児童館では、子どもたちがしめ縄づくりや花餅づくりをしていて、真剣な眼差しで作業していた。(12/26 池田 6)

いいから黙って勉強しろ！

ひとこと

大人たちが、経済的利益を最優先に考え目先の損得に気を取られている間に、それが子どもたちにまで広がったのでしょうか。小学校で、まずひらがなを教えようとする、「先生、これは何の役に立つのですか？」と訊いてくる子がいるそうです。それに対して、神戸女学院大学名誉教授の内田樹さんは、著書『下流志向』で次のように言われています。

その問いに対して、教師は答えることができない。できるはずがない。できないのが当然なのです。そんな問いが子どもの側から出てくるはずがない、ということが教育制度の前提だからです。

教育を受ける権利は、子どもにとってもっとも大切な権利です。その権利について、当の子どもたちの側から「説明の意味が分からなかったら、教育を受ける権利なんか要らない」と言い出した。

そんな想定外の問いに対して絶句するのは当然です。しかし、「勉強すると、これこれこういう『いいこと』があるんだよ」と功利的に誘導しようとする大人たちがいます。そういう大人たちもまた「そのような問いかけはあってしかるべき」と考えている。これが最初の、最大の「ボタンのかけ違い」だと僕は思っています。答えることのできない問いには答えなくてよいのです。

赤ん坊が言葉を覚える時は、これから何を学ぶかを知りません。それが学ぶことの起源で、何を学んでいるのか知らない、その価値や意味を言えないことこそが学びの動機付けです。(抜粋・要約)

センターから

12月19日に土岐地区の班長会がありました。「指導日誌より」にも記載しましたが、9班(泉小校区)の斎藤さんから、中学では尖っていた高校生に出会ったことから次のようなお話があつたので紹介します。『今までの巡回の中で、何か悪さをしている子がいないか?という目で歩いていた自分に気が付き反省しました。今回はあいさつひとつでも返してくれる子に感激できました。これからは、どんなあいさつをしてくれる子に出会えるか、それを楽しみに声かけしていきたいと思います。』どんな子にも、返事があっても無くても、声かけを続ける中で嬉しいことが発見できれば素晴らしいですね。